

編集室から

みなさまにとって春とは、どのような季節でしょうか？転勤族の我が家では、数年に一度、引越、分かれ・出会いの季節でもありました。

青春時代、情緒的な面から秋が最も好きな季節でした。黄昏れゆく景色とともに、なんとなく哀愁を感じる風情に浸っていたいと感じたものです。

大阪での一年の浪人生活を終え、初めて住む金沢にやってきたのは、今から約半世紀前。親元から離れ、学生生活を送る開放感。雪洞が灯り、夜桜が咲き誇る金沢は、とても色っぽく感じたことを今でも覚えています。おそらく、お酒の力もあったかと思いますが、町に色気を感じたことは初めてでしたので、印象深いのかもかもしれません。

以来、春もかなり好きな季節へと変わりましたが、桜と連動しているためか、「ザ・春」という期間は、あまりにも刹那に思います。

仕事柄、3月の年度末にピークを迎え、疲労も困憊となっている年を繰り返してきたため、短い春を味わうというより、充電不十分でまた、走り出さなければならない年が続いていたようにも思います。

能登半島地震が起きた二年前の春は、ほとんど記憶がありません。ただ、「それでも桜は咲くんだ」と、生命力の野太さに感銘を受けたことだけは、覚えています。

加えて近年では、気候変動による二季化が進み、「冬の次は夏」的な気象となりつつあることも、春の短さを感じさせているようです。

先月は、厳しい寒さから、一気に暖かくなったかと思うと、また一気に10度くらい下がるという不安定な月だったためか、桜の開花が若干早いようです。

今年こそは、「ゆっくり春を堪能したいなあ」と、しみじみ思うこの頃です。(は)



このニュースは、地域計画に携わる若手の技術者の参考となることを目的に発行を始めました。

その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2026/04

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

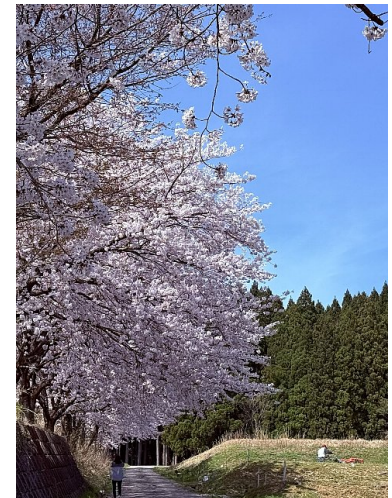
Email usric@neting.or.jp

2026/04

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

卯 月



能登半島薬師の里にて
by hama

**復興するぞ！
能登・北陸**

前回はセルフメディケーションの話から発展して、頼れる薬剤師の存在が重要になるという話をしました。自分が体調不良に陥った時を想像してみてください。何度か経験した症状で、良く効く薬が判っているのなら不安は少ないかもしれません。でも、初めての症状の場合はどうでしょう。医師の診察を受けないのであれば、相談できる医療者として最も身近な存在はおそらく薬剤師です。そして、薬の方にも制約があります。例えば風邪に最も多く使われる内服薬のロキソニンですが、二〇一一年からOTC薬として医師の処方箋なしでも薬局で購入できるようになりました。しかし第1類医薬品と言われて、薬剤師が対面しなければ販売できないと決められています。良く効く薬は、薬剤師が使用法やリスクの有無をきちんと確認しなければなりません。

◎

調剤薬局やドラッグストアで薬剤の販売を担当しているのは、薬剤師と登録販売者です。登録販売者は、都道府県が毎年行っている試験に通れば得られる資格です。試験を受けるのに、学歴も実務経験も一切制約はありません。それに対して薬剤師は、受験勉強をして大学の薬学部で合格し、六年間の講義や実習を経て、平均合格率が七十%の国家試験を通らなければ資格を得られません。大学には様々な学部があるけれど、六年制なのは薬学部と医学部だけです。高度な専門性を持つ人材を育

成する事と医薬分業を着実に推進する事を目的として、二〇〇六年に薬剤師国家試験を受験するための薬学部は四年制から六年制になりました。

◎

このように薬剤師は医療の中で存在感を高めていくことが期待されているのですが、現実問題として薬剤師の力が十分に発揮されているかと言えば残念ながらYesとは言えません。調剤薬局やドラッグストアの薬剤師は、信頼関係ができる前に移動してしまうからです。

◎

医療機関で処方を受けて定期的に調剤薬局へ行く方は、よくご存知だと思います。個人経営の薬局でもない限り、薬剤師は数年で変わってしまします。理由は簡単です。中小規模の薬局は経営的に成り立たず、大手資本の寡占状態になっているからです(クラブ)。会社が大きくなると、教

育や昇進のため移動が頻繁になるのは他の企業と同じです。それがセルフメディケーションの足枷になってしまっています。そして調剤薬局の薬剤師がコロコロ変わる事は、我々医師にとっても頭の痛い問題です。

アインHDは2位以下を引き離す

順位	企業名	売上高
	アインHD+クラブ	5000億円強
	ツルハHD+ウエルシアHD	4000億円強
1	アインHD	3575億円
2	日本調剤*	3219億円
3	ウエルシアHD	2825億円
4	スギHD	2183億円
5	クオールホールディングス*	1716億円
6	マツキヨココカラもカンパニー*	1625億円
7	クラブ	1536億円
8	ツルハHD	1259億円

(注)売上高は25年2月期の調剤部門。*は25年3月期、アインは24年4月期、ツルハは24年5月期、クラブは24年3月期の連結



【プロフィール】
（いがきとしお）金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とっても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松で又クヌクしています。

濱の起業塾 八十四 『地域経営の視点』⑦

地域を再生しようとする際、最もベースとなるのは、「地域経済の健全化・黒字化をどう考えるか」であると思う。

一つの自治体を仮想的に「国」と捉えると、貿易収支は、域外収支となる。地域の貨幣が域外に流出することは、赤字要因。逆に域外の貨幣を域内に流入させることは、黒字要因となる。地域にとつての「外貨獲得」とは、インバウンド経済というより、日常の経済活動で、如何に域外からの流入を図るか、を忘れてはならない。

もう一つ重要な視点は、域内循環である。せっかくな稼いだ「外貨」を右から左で流出させてしまっていては、地域に滞留する経済規模はいつまでたっても拡大しない。たとえば、日々の食材(分かりやすく野菜を例にする)を域外資本のショッピングセンターで購入するのではなく、地元(の農家から直接仕入れてくる八百屋から買う)と、生活者(八百屋・農家と、貨幣が地域に留まったまま流通する。途中何処かで、地

域外からの調達が含まれた時点で、その分の貨幣が流出(赤字要因化)することになる。大型ショッピングセンターの誘致は、雇用の場の創出にはなれど、儲けはすべて本社・支店がある地域にもたらさせることを、皮肉にも手助けしていることになる。

ちなみに、従業員が全て域内から採用された場合、そま給与分は、黒字要因となるが、民間企業が持続的に営業活動するには、人件費を上回る経済効果が得られているはずであるから、その差分は、赤字要因と考えられる。

このように見てくると、例えば道の駅にコンビニチェーンの新店を見込むことの無意味さが解ってくる。地域経済的には、赤字要因を増大させようとするだけで、道の駅本来の役割・機能からほぼ真逆の結果を招こうとしているに等しい。

地域を経営する視点に乏しい思考は、地域再生の仇となりうることを、首長や議員こそ、自覚してほしいと思う。

きただより112 弘前大学 地域社会研究会 上村 康之 『議員定数削減と選抜高校野球代表校の選出についての雑感』

先の2月、真冬の大雪の最中、与党のトップが2人とも雪国の選出ではないので、多雪地方への配慮など微塵もなく、衆議院選挙が行われ与党が大勝した。これとほぼ毎回、出てくるのが「一票の格差問題、この選挙は違憲かどうか」というもので弁護士団体が登場。

具体例を挙げると、昨年7月の参議院選挙に仙台高裁秋田支部は「違憲状態」と判断した。弁護士団体がいわゆる一票の格差を理由に選挙の無効を求める訴えを、全国14の裁判所に起こしている。訴えを起こしたのは、東京に本部を置く弁護士団体。原告は各県内在住の有権者。7月20日の参議院選挙について、一票の格差を是正せずに行われたとし、選挙の無効を訴えている。

要は「いまの選挙制度では、一票の格差が大きいので是正せよ」という主旨。地方部の一票に比べ都市部の一票は軽いというもの。毎度主旨はわかるが、「ではどうしたらいいのですか?」、ニュース報道を見る限り対案を目にしたことはないはずだ。暴論を承知で言うと、「弁護士さんたち、もっとたくさん世の中に案件があるのでは」と(もちろん、弁護士によって得意、不得意な分野はあるだろうが)、彼らの主張通りになれば、地方部の議員はさらに減少し、都市部の議員がどんどん増加していく。

青森県では、中選挙区制の時は1区4人、2区3人であった。その時に比例区が導入されたが2月の衆議院選挙では与党が1人であった(与党の中には、「定員削減を比例だけに行え」という暴論もある。これでは小政党は議員当選がさらに難しくなる)。

議員数減少で地方部の声が届かなくなるというが、都市部にも問題がある。

私は20代の頃、東京多摩地域に住んでいた。当時は小選挙区ではなかったものの、東京都選出の議員増加に対応するため、これまでに選挙区割が2回変更になったはずだ。立候補する側も地盤が変わり、有権者も支持していた人には投票ができないなどの面も相当にある。選挙区の定数については、どういう区分けをしても問題が生じるのであろう。

これに対し、選抜高校野球代表校の選出(選挙と野球という全く次元の違う話で恐縮です)であるが、この出場校32校が前年の秋季大会の結果を基に選出される。今回は、北海道1、東北3、関東4、東京1、北信越2、東海3、近畿6、中国2、四国2、九州4、21世紀枠2、秋の神宮大会優勝チームのブロックが+1である。東北地方は一昨年まで2であったが3に増加した。人口割なのか、レベルなのか、東北(8,612※)の方が中国(7,254)、四国(3,692)よりも人口は多いことと、このおよそ20年から30年のレベル向上からすると、東北地方の野球ファンには、やるせない想いがあった。また、東京(14,048)も僅か1(年によっては2)というのも、人口比からしても少ない。もちろん、すべて人口割、レベル(近年は地方間の格差が縮小しているのでは)にすると、飛んでもないことになるので、これがベストではないだろうがベターなのかも知れない。

※()内は2020年国勢調査、単位:千人。

『過疎集落が取り組む地域再生への道13』

(一社)しろにし 理事 白川 晶也

昨日は当清水地域にある“歴史ロマンの湯”しみず温泉前にて、恒例の“さくらまつり”が行われました。気が付けば、地元の役場を早期退職してちょうど3年。ちらほら咲き始めた桜の花を見ると、少し感慨深い気持ちになります。そのしみず温泉をはじめ、宿泊施設やキャンプ場などを運営するのが、前回お話しした「観光系の財団法人」である(一財)有田川町ふるさと開発公社です。私も昨夏から、その副代表理事を掛け持ちさせていただくことになりました。

そんななか、年度末ということもあり、公社始まって以来初めてとなる(未確認情報)、従業員の期末面談を行いました。9か月ほど前にはビジョンの共有、年明けには経営状況についての説明会を行いました。今回は事前に調査票に記入していただいたうえで、一人ひとり情報交換をさせていただきました。「急に来たヤツが何を偉そうに…」とならないように、できる限り顔を出すようにはしていましたが、いざ面談となると小心者の私などは「何を言われるんやろ…」とビビってしまいます。しかし、いざ個別面談をやってみると、そんな心配は取り越し苦労でした。地域における公社(運営施設)の重要性や課題の認識、改善意識などはそれぞれ感じていらっしやる。でも、遠慮がちなみなさんは、出しゃばらずに待っている。同じ“指示待ち”の状態でも、“やる気のある”指示待ちであれば、伸びしろはグンと大きくなります。「先にやっておいたで」「これ、こんな感じで見直せへん?」…みんながそうやって自分から動き出せば、「北京で蝶が羽ばたくと、ニューヨークで嵐が起ころ」バタフライ効果の話ではないですが、状況は一変するはずですよ。

また、もう一つの「農業系の財団法人」である(一財)大和屋さんも、昨夏東京からやってきた移住者の加入を機に大きく変わり始めています。6年ほど前、地域再生マネージャー事業に取り組み始めた役場職員時代から私もお付き合いをさせていただいていますが、濱さんもお存じのとおり、当時提案はすれどピクリとも動かず(失礼)。しかし移住者がプレーヤーとして加わり、私も民間の立場で微力ながらお手伝いさせていただくなかで、webサイトの刷新を済ませ、4月からは簡易宿所の開業や和歌山大学との連携も始まります。役場人事時代から“自律型”の人材・組織の重要性は分かっていたものの、まちづくり法人であるしろにし・ふるさと開発公社・大和屋は、いずれもが数人から20人ほどの小規模事業体です。組織が大きければ時間はかかりますが、この地域、この3法人にはすぐに良い“嵐”が吹くのではと感じています。



『相模の国から ～大魔神のたび～』 エジプトへの旅 2025.12/19～28③
茨城県境町 参与 溝口 久

エジプトに来て3日目、ナイル川のクルーズは続いている。エドフに寄港。そこから馬車に揺られて目指すはプトレマイオス朝時代(BC237～57年)に築かれたホルス神殿だ。馬車はこの街の名物だ。入り乱れる馬車の群れ、砂埃を舞い上げながら疾走するこの道中是否応なしに胸が高鳴る。

ホルス神殿に着くと高さ36メートルを誇る巨大な塔門(ピロン)。垂直の壁面には敵を打ち倒す王の姿が巨大なレリーフとして刻まれ、我々を圧倒する。一歩足を踏み入れれば、そこは壁画の迷宮だ。列柱から礼拝堂の隅々に至るまで、壁面という壁面が精緻なヒエログリフと神話の図像で埋め尽くされている。この神殿の主は天空と太陽の神ホルス。中庭では黒い花崗岩から彫り出されたハヤブサ姿のホルス神像が、鋭い眼光で参拝者を見据えていた。神殿の屋根スラブが黒ずんでいる。長い歴史の中で神殿内部には土砂が入り込み、床が高くなったところで人が生活をしていた時に起こした火事によるものである。

一旦船に戻りランチ後休憩、船はアスワンに着き、夜のコム・オンボ神殿まで歩いて行った。ここで見た壁画は「王が神々を敬うことで、エジプトに平和とナイルの恵み(ワニの神)がもたらされ、勝利(ハヤブサの神)が約束されている」という政治的・宗教的な正当性を表している。

コム・オンボ神殿はBC2～1世紀頃(プトレマイオス朝時代)に建設された。古代エジプトの長い歴史の中では比較的新しい時期に属し、ギリシャ文化の影響を受けた「グレコ・ローマン様式」の神殿。近くにはクロコダイルミュージアムがあり、ワニのミイラがある。船に戻れば、ベッドの上にタオルで作られた動物たちが毎日姿を変えて出迎えてくれる。ワニ、孔雀、象があった。

エジプト4日目。アスワンに停泊した船から早朝4時にバスで出発。めざすはアブ・シンベル神殿。古代エジプトを象徴する巨大な岩窟神殿で、定番の訪問先だ。紀元前13世紀、ラムセス2世が建設した。大神殿には高さ約20mの4体のラムセス2世座像が並ぶ。左から、若き日の姿から年を重ねた姿へと順に並んでいるとされる。左から2番目の像は、紀元前の地震によって上半身が崩れ落ちている。一方、小神殿はラムセス2世が最愛の王妃ネフェルタリと女神ハトホルのために建造した。

目にしている神殿は当時のものではなく1960年代、ナイル川のアスワン・ハイ・ダム建設により、この神殿は水没の危機にさらされたため、ユネスコの働きかけにより世界50カ国近くの協力を得て、巨大な神殿を1,000個以上のブロックに切り分け、元の位置より約60m高い丘の上へと移築されたもの。

このことが「人類共通の宝を守る」という世界遺産条約の誕生に繋がっている。そして、この日の夜は世界一大きな絵プロジェクトの第2回目でアスワンにある「ナイル博物館」前広場で行われた。

エジプト5日目、ナイル川観光の最後の訪問地はイシス神殿。アギルキア島にあるので、船で15分程かけて渡る。「エジプト最後の神殿」と呼ばれる。BC380年頃、ネクタネボ1世(エジプト人の手による最後の王朝)によって、最初の本格的な神殿が築かれた。ローマ支配下のAD1世紀～2世紀頃、ローマ皇帝ハドリアヌスらが門や休憩所を付け加えた。

そもそも「フィラエ島」にあったが、アスワン・ハイ・ダムの建設により水没の危機にさらされ、近くのアギルキア島へ移設されている。アブ・シンベル神殿も移設、こちらも移設。

アブ・シンベルはアスワン・ハイ・ダムのさらに上流にあり、ダムが完成して水位が上がると完全に沈んでしまう運命にあったので、ダム湖(ナセル湖)の水が迫る中、1964～68年にかけて沈む前に完了。

一方、イシス神殿はアスワンダムそばにあり、1902年に完成したアスワンダムの影響で、1年のうち約9ヶ月間はすでに水に浸かっている状態が何十年も続き、夏の間だけ水が引いて姿を現していた。1960年代にアスワン・ハイ・ダムができると、神殿が常に3分の1ほど水に浸かっていたままになったので、神殿の周りを鉄板の壁で囲み、中の水をポンプで抜き取ってからの解体作業。1972～80年のことであった。

ナイル川に沿った観光を終え、アスワンから空路でカイロへと向かった。滞在先はピラミッドに近いモーベンピックホテル。海外のホテルにはプールがあるとこが多い、ここにも広々としたガーデンプールがあった。水着を携えてきたが、水面を渡る風は冷たく泳ぐことは断念し、庭園の散策に留めた。

